



ニッポン ドクター和の 臨終図巻

長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東京医大卒業後、大阪大第2内科入局。1995年、兵庫県尼崎市で長尾クリニックを開業。外来診療から在宅医療まで「人を診る」総合診療を目指す。近著「葉のやめどき」「痛くない死に方」はいずれもベストセラー。関西国際大学客員教授。

たくさんいます。

人は皆、一人で死にます。だから、孤独、または孤独死は寂しくてみじめなものだという考え方は、そろそろやめにしませんか。

私は仕事柄、さまざまな人と出会いますが、「一流」と言われる人には一つの共通点があると思っています。それは、孤独を恐れず、勇氣に換えて生きて

いるということ。

1月5日に亡くなられた旅行ジャーナリストの兼高かおるさんも、まさにそのお一人だと感じます。東京都内の介護施設にて、90歳での本当の旅立ちでした。死因は心不全ということですが、突然死ということではなく、年齢とともに心肺機能が低下した老衰によるものだと推測します。

おるんや…と幼かった私はテレビを通して新しい女性像を見た思いでした。生涯で訪れた国は150カ国以上。距離にして地球180周。

伝説の番組『兼高かおる 世界の旅』が始まったのは1959年のこと(当初の番組名は『兼高かおる 世界飛び歩き』)。わが国の海外渡航者が年間1万人という時代でしたが、テレビに映るものすべてが珍しかったのを覚えています。

そんな兼高さんは、生涯独身で通されました。なぜ結婚しないの? と質問されたとき、彼女は「結婚することがわからない」と答えたそう。女性が専業主婦になるのが当然だった時代のこの発言。その兼高さんの最期が、介護施設でたとえ家族がいなかったとしても、誰がその死を「孤独で可哀そう」だと言えるでしょうか?

私は、人間の尊厳は「移動できること」だと日頃から話しています。認知症の人、旅行をすると元気になる、笑顔が戻ります。

兼高さんの人生は「移動」の連続でした。独身を貫き、一番大切と思うことを実行し続けた人生。その先に訪れた「尊厳に満ちた孤独死」ではないでしょうか。



もちろんスタッフはいたのでしようが旅先ではひとり決断、実行せねばならぬことも多くあったはずで。こんな女性が

おるんや…と幼かった私はテレビを通して新しい女性像を見た思いでした。生涯で訪れた国は150カ国以上。距離にして地球180周。

89 旅行ジャーナリスト 兼高かおる

昨年末にこの連載で、平成に鬼籍に入られた人を駆け足で紹介しました。その記事にネットの掲示板では「なぜわざわざ孤独死と書くのか?」と非難めいた意見もいくつもありました。私は、「孤独死」という言葉が平成を象徴する一つのキーワードと考へ、あえて書きました。非婚の人が増える中、誰もが家族に看取られて死ぬということはもはや幻想です。

尊厳に満ちた孤独死

おるんや…と幼かった私はテレビを通して新しい女性像を見た思いでした。生涯で訪れた国は150カ国以上。距離にして地球180周。